

身のうさは人しも告じ：「浅茅が宿」作中歌補注

飯倉，洋一
山口大学助教授

<https://doi.org/10.15017/10386>

出版情報：文献探究. 28, pp.8-11, 1991-09-30. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：



身のうさは人しも告じ

―「浅茅が宿」作中歌補注―

飯倉洋一

秋になれば帰ってくるという約束の言葉信じ、戦火の中で妻は夫を待ち続けた。しかし「秋にもなりしかど風の便りもあらねば」、妻は「恨みかなしみおもひくづをれて」歌を詠んだ。

身のうさは人しも告じあふ坂の夕づけ鳥よ秋も暮ぬと

このように詠んだところで、あまたの国々を隔てている夫のもとにこの歌が届く術はない。矢野公和「私の声が聞こえますか―「浅茅が宿」私論―」（『共立女子短期大学文科紀要』第二四号、一九八一年二月。のち『兩月物語私論』に所収）は、この歌自体が、勝四郎に決して届かない機能を内部に持っていたことを、「木綿付鳥」の本来的意義から説いているが、いずれにせよ、『兩月物語』「浅茅が宿」の中で、主人公の勝四郎とその妻宮木の隔絶を決定的に印象づける場面がこの歌を核として構成されていたことは確かであろう。従来、この歌の典故として、『兩月物語』の諸注釈書は、『古今和歌集』巻十一、恋一、読み人しらずの歌を挙げている。

逢坂のゆふつけ鳥もわがごとく人やこひしき音のみならん

ところで私は一九八九年度、山口女子大学において近世文学演習を担当し、当時の三年生とともに『兩月物語』を読む機会を得た。そのさい、この歌について調査した当時の受講生井崎加恵氏は、従来典拠とされている『古今和歌集』の歌以上にこの歌に近い歌として、『続後拾遺和歌集』春

上の次の歌を提示した。詠者は柿本人麻呂とされている。

春きぬと人しも告げず逢坂のゆふつけ鳥の声にこそ知れ

「春きぬと」と「秋も暮ぬと」の対応、そして何よりも「人しも告げず」と「人しも告じ」の一致を見れば、『古今和歌集』の歌よりも、井崎氏の挙げた『続後拾遺和歌集』の歌の方が典拠としてふさわしいと思われるが、管見の限り、この歌を典拠として指摘したものはこれまでにない。

井崎氏はその後追加報告として、この歌が『万代和歌集』春歌上、『夫木和歌集』春部一にも収められていることを指摘した。さらに『俚言葉覧』の「ゆふつけとり」の項目では、この歌が用例として出ていることもつきとめた。ちなみに『俚言葉覧』は『夫木和歌集』からこの用例を拾っている。また『夫木和歌集』には「雲葉」と注記されており、『雲葉和歌集』巻一、春歌上にも収められていることがわかった。この歌はしたがって比較的よく知られていた和歌ではなかったかと思われる。

ついでに言えば「人しも告げず」の表現は非常に珍しく、『新編国歌大観』各巻の索引篇を通覧してもこの歌以外には見当たらない。秋成が、この歌から、宮木の歌を構想したのはほぼ間違いないところである。

ところで、この歌が人麻呂の歌とされているのは非常に興味深い。秋成の人麻呂への造詣は贅言するまでもなく、「菊花の約」において人麻呂歌が重要な役割を果たしていたことは、重友毅「菊花の約」と人麿の羈旅歌」「国歌と国文学」二十巻二号、一九四三年二月。のち『兩月物語の研

究」および『秋成の研究』所収）がつとに指摘している。

そうして、実はこの歌は『人麻呂集』にも収められている。『人麻呂集』は「三十六人集」の一つで、近世期には正保四年版歌仙歌集本でもっとも流布している。秋成も『古葉刺言』のなかで「三十六人の歌集」に触れている。秋成の見たのもおそらくこの流布本系の本であつたろう。歌仙歌集本『人麻呂集』には、西本願寺本『人麻呂集』にない、国歌六十六首があり、その中にこの歌が入っている。ちなみにこの国歌歌群は平安時代以降に付け加えられたものであり、物名歌を得意とした藤原輔相あたりの作かと言われている（明治書院版『和歌大辞典』「輔相」の項）。いわゆる「隠題」の歌である。「隠題」とは、ある事物の名（この場合は国歌）を内容に関係なく詠み込むことであるが、この歌は「しもつけ」の国歌を詠み込んだ（「ひとしもつけす」）歌として出ているのである。

秋成が、「浅茅が宿」にこの歌を利用するにさいして、『続後拾遺和歌集』に拠ったか、あるいは『夫木和歌集』などの私撰集から採ったか、『人麻呂集』（正保版歌仙歌集本）を見たかは確定できない。いずれの歌集も秋成が目にしうるものだからである。しかし、「隠題」の歌として出ているのは『人麻呂集』だけであるから、これに拠ったとすると、宮木の歌もまた、「しもつけ」という地名が隠された歌である可能性が出てくることになる。

ところで宮木の歌は作中にもう一首ある。末期の歌となった「さりとともと思ふころにはかられて世にもけふまでいける命か」という歌であるが、この歌の典拠は『日本古典文学大系 上田秋成集』（中村幸彦校注）が指摘するように、正保版歌仙歌集本『敦忠集』所収の歌である。『続後撰和歌集』にも出るが、こちらは「思う心になくさみて」となっている。この歌の場合は、あえて勅撰集ではなく三十六人集の一である『敦忠集』からそれも正保版歌仙歌集からとっているのである。とすれば本稿で問題とする歌も、歌仙歌集本『人麻呂集』に拠った可能性は少なくない。

さらに『歌聖伝』という人麻呂研究書のある秋成のことであるから、十三代集にも入っていない勅撰集や膨大な歌数の私撰集に拠った可能性よりも、『人麻呂集』に拠った可能性の方がはるかに高いと言つてもよいのではなからうか。この推定が許されるとすれば、「浅茅が宿」の「身のうさは」の歌にも「しもつけ」が詠み込まれているものとして見る必要があることになる。

しかし勝四郎は下野ではなく下総国葛飾の農民である。下野とは近いけれども、近いというだけである。この歌に「隠題」を読むのは深読みに過ぎるのであろうか。

その判断を今保留して、人麻呂歌を改作したものが宮木の歌であるという視点から考えれば、まず「春きぬと」の部分はこの作品の状況設定にあわせて「秋も暮ぬと」と改変したことは、物語の設定からいっても極めて自然であるが、人麻呂歌にない「身のうさは」にはどういう意味が担われているのであるか。むろん、宮木のつらい境遇をそのまま言語化したといえればそれまでだが、私は、ここにも「美濃」という地名が隠されているのではないかという考えを捨て切れないう。いささか迂遠ではあるが、その理由を以下に述べてみる。

歌を詠むという行為には本来呪言的な要素がある。男女の別離の危機をひとつの歌が救った例としてすぐに思い浮べることができるのが、『伊勢物語』二十三段である。井筒のもとで誓った幼い恋を成就させた夫婦に危機が訪れる。男が別の女の所に通うようになったのである。女はそこで「風吹けば沖つしら波たつた山よはにや君がひとりこゆらむ」と歌い、結果的にこの歌が夫を引き戻すことになる。歌の力が二人の愛を呼び戻した説話としてこの章段はあまりにも有名である。

男女の別離をテーマとする「浅茅が宿」において、この章段のことが秋成の脳裏にかすめたかどうか。七年後に故郷に戻り、妻と再会したと思いきや、実はそれが物の怪の仕儀だと知り、悲しみにくれる勝四郎の茫然自

矢のさまを、秋成は「我が身ひとつは故の身にしておあゆみ廻るに」と描写している。「我が身ひとつは故の身にしてお」は『古今和歌集』巻十五、恋五の業平の歌、つまり『伊勢物語』四段の歌「月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひとつはもとの身にしてお」を引いたものである。鷗月洋の『雨月物語評釈』も、「この辺の描写は『伊勢物語』のこの歌の前後の文章（引用文略）に、よく似た情趣をたたえているといえよう」と述べている。

男女の別れをモチーフとした八歌物語として「浅茅が宿」は構成されていた。宮木の歌二首にこめられた女の恨みと悲しみが読者に投げかけられていることは疑うことはできないし、また、最後に稚拙ながらもこのこもつた歌を詠む勝四郎の立場から言えば、「浅茅が宿」は、勝四郎の「歌」の獲得の物語とも言える性格を持つともいえる（嶋田彩司「物語の番人―「浅茅が宿」私解―」「明治学院論叢」四四一号、一九八九年三月）。かかる八歌物語としての「浅茅が宿」の背後に『伊勢物語』の影が揺曳していると言うのは、さほど強弁ではあるまい。

この歌にはもともと「逢坂」が詠み込まれている。「白峯」の冒頭を想起すまでもないが、逢坂の関は京都と京都以東の諸国の境界としての機能をもった歌枕である。宮木の歌にはいやおうなく、京都と東国の境界が、すなわち夫婦の空間的隔たりがきわめて象徴的に示されていたことになる。

ところで、宮木の歌は、夫婦の別離の時を直感した絶望の歌でありながら、なお「あふ坂の夕づけ鳥」に夫への伝言を懇願するという形をとっている。「世とゝもに憑みなき人心かなと、恨みかなしおもひくづをれて」という悲しみの淵から、それでも渾身の祈りを込めて詠んだこの歌の呪力は、しかし「かくよめれども、国あまた隔てぬれば、いひおくるべき伝もなし」と、非情にも否定し去られている。本稿の文脈でいうなら宮木の歌の「逢坂」は呪力を發揮しえなかつたということになる。

しかし宮木の意図とは別に、この歌には意外な呪力が込められてしまった。それは、この歌に隠された「美濃」と「下野」の地名の呪力であった。宮木が歌を詠んだ後、世の中はますます騒然とし、人心は荒んで、宮木は貞操の危機に身をさらされながらも、その地を動かさず、その年は暮れ、新しい年になる。そのあとの文章に、

あまさへ去年の秋京家の下知として、美濃の国群上の主。東の下野守常縁に御簾を給びて、下野の領所にくだり、

とあり、これが戦乱をより厳しいものとしたと叙述される。『雨月物語』の版本で見ると、この部分は「身のうさは」の歌の七行後に出てくる文章である。それを契機に「野の伏等はここかしこに薬をかまへ、火を放ちて財を奪ふ。八州すべて安き所もなく、浅ましき世の費なりけり」という情勢となってしまう。物語に明示されていないが、宮木はこの戦火の拡大によって死に至るのである。

このように見てきた時、宮木が意図しなかつた部分で、和歌に隠された言葉が、すなわち「身のうさ」に隠された「美濃」と、「人しも告じ」に隠された「下野」が、「美濃の国郡上の主。東の下野守常縁」の「下野」東下を促し、その結果、宮木の横死―夫婦の愛の終結という悲劇―を導く呪言として機能してしまつたという風に読めるのである。しかも決定的なことに、それは歌の「秋も暮ぬ」に対応して、「去年の秋」の「京家の下知」によつてもたらされたのである。「年あらたまりぬれども」の後に来る「去年の秋」とは、宮木が歌を詠んだ年の秋に他ならない。夫の帰ってくる約束の時としての「秋」が、決定的な戦禍をもたらす「秋」として立ち現われたのである。ちなみに東氏の領所は史実では下総であり、下野ではない。したがって諸注釈書はここで「下野」を「下総の誤り」と注するのだが、果たして単純な誤りと片づけてよいかどうか。歌の呪言性を

印象づけるために敢えて「下野」としたとは考えられないであろうか。

この物語の悲劇は、和歌の呪力に託して夫の帰りを祈ったその歌に、全く逆の呪力が働いてしまったというところにあつたのではなかったか。それは、同じく夫婦の別離の危機をテーマとしながらも、歌の力によってそれを回避した『伊勢物語』二十三段の世界を、非情なほどに転倒した物語であつたとも言えよう。

表に「逢坂」を詠んで夫婦の隔絶を象徴し、裏に「美濃」「下野」を詠み込んで負の呪力を示した宮木の歌。それが人麻呂歌の「隠題」という方法に倣った巧妙な仕掛けによって支えられていたとしたら、秋成のアイデアは、まことに卓抜であつたといわねばならないだろう。

「浅茅が宿」ではこのような言語の呪術ともいうべき機能を用いた物語構成法が他にも見られる。高田衛が解明した（「幻語の構造―雨と月への私注」『別冊現代詩手帖』第一巻第三号、一九七二年一月）。のち『江戸幻想文学誌』所収）ことだが、勝四郎が京に旅立つ場面で宮木に早い帰郷を約束するその言葉の中にそれはあつた。

いかで浮木に乗つも知らぬ国に長居せん。葛のうら葉のかへるは此秋なるべし。

この言葉の「浮木に乗つも」と「葛のうら葉のかへる」は勝四郎の意志を離れて、伝統的和歌的文脈の中で別の意味をもつてしまう。すなわち「浮木に乗つも」は『源氏物語』「松風」の「いくかへり行きかふ秋を過しつ浮木にのりてわれ帰らん」を踏まえ、その原拠では「浅茅が宿」本文の「此秋までに」とは逆の「幾つもの秋」を内包している。また「葛のうら葉のかへる」は、『玉葉集』巻十四の「秋風と契りし人はかへり来ず葛のうら葉の霜がるるまで」を意識していたとすれば、これまた帰ると約束する勝四郎の言葉と逆対することになる。詳細は高田論文に譲るが、要す

るにこの秋に帰るといふ勝四郎は実は帰っては来ないで、妻の恨みを買うことになるという物語のゆくえがここに呪言化されていたのである。

宮木の「身のうさは」の歌にも、これと同じような「幻語の構造」があつたのではなかったか。しかも、宮木の歌では、もはや読者には気づかれることさえ期待しない、一層高度な言語遊戯がその中に封じ込められていたように私には思えるのである。

— 山口大学助教授 —

（付記） 本稿は文中にも記した通り、一九八九年度、山口女子大学における近世文学演習において井崎加恵氏が発表した内容を報告し、合わせて若干の私家を付したものである。本稿を執筆したい旨を井崎氏に伝えたところ快諾を得た。感謝したい。